

春楊 はる やなぎ

葛城山 かつら き やま

たつ雲の

立ちても坐ても 妹をしそ思ふ

柿本人麻呂歌集(巻十一・二四五三)

『万葉集』巻十一は「柿本朝臣人麻呂の歌集」にあった149首から始まります。柿本人麻呂は天武天皇・持統天皇のころに活躍した『万葉集』を代表する歌人の一人ですが、自ら歌を作るだけでなく、すでにあった歌を歌集に書き留めていたようです。『万葉集』は漢字ばかりで書かれており、人麻呂歌集の歌は文字数が少ない傾向があります。今回の歌の原文は「春楊 葛山 發雲 立座 妹念」。これで5・7・5・7・7の31首を表しています。たった10文字で一首を示すのは、同じく巻十一・二四四七の人麻呂歌集と並んで、『万葉集』中、最少です。

やまと
万葉がたり

この歌は「春楊」から始まっていますが、葛城山を導くための前置きで、春の楊そのものを詠んだわけではありません。「葛」は蔓草でクスともカツラとも訓みますが、ここでは「かづらき」の地名を表しています。楊はよく「かづら(かすら)」(髪飾り)にされました。動詞では「か

づら」となります。その「かづらき」山にたつ雲のように、立つても座っても妹(女性)のことを思う、という歌で、雲を比喻に用いています。立つ雲、居る雲、どちらも歌によく詠まれますが、「居る雲、どちらも歌によく詠まれますが、三輪、吉野など数々の山に湧き立つ雲のように、立つても座っても妻をこそ思うよ。」

る「雲は雨や遠き、遮るものとしてイメージされ、立つ」雲は「八雲立つ」のようにどちらかという祥瑞のイメージがあります。日差しの暖かさを感じる時期となりました。外に出て空、雲、山々を見渡すだけでも良い気分転換になりそうです。

【訳】春の楊を纏(髪飾り)にする葛城山に湧き立つ雲のように、立つても座っても妻をこそ思うよ。

山が詠まれています。『古事記』・『日本書紀』に「たたなづく青垣 山隠れる やまとしうるはし」ともあるように、県内の山々すべてが記紀・万葉の故地といえます。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

たまきはる 宇智の大野に 馬並めて

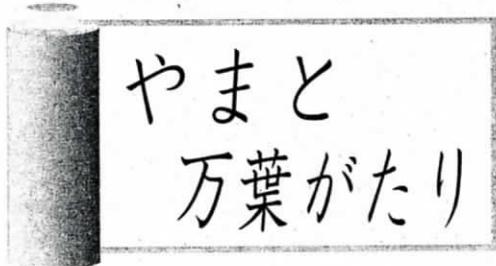
朝踏ますらむ その草深野

中皇命(巻一・四)

で一層具体的に描写します。五條市の「宇智」が、舒明天皇の猊の場でした。5月5日に猊をする行事があったので、その時期だったかもしれません。

『万葉集』巻一は雄略天皇の長歌から始まり、2番の歌が舒明天皇の国見歌で、3、4番が「天皇の、宇智の野に遊猟しましし時に、中皇命の間人連老をして献らしめたまへる歌」です。今回掲載の4番歌は3番の長歌に付随する反歌です。中皇命とは舒明の皇女・間人皇女

かと言われています。歌を作るには若く、皇女を世話する一族の「老」という人が皇女の立場で詠んだと考えられます。さぞかしお年寄りかと思ってしまうのですが、「老」は名前です。『万葉集』には「老」、「老麻呂」などの名を持つ人物が10例ほど見え、人気の名前だったようです。



3番の長歌、「やすみしし わが天君の朝には とり撫でたまひ 夕には い縁せ立たしし…… 御執らしの 梓の弓の中弭の 音すなり」は、『古事記』によく似た歌があります。袁村比売が雄略天皇に歌った「やすみしし 我が大君の 朝には い倚り立たし 夕には

い倚り立たす 脇机が下の 板にもが 吾兄を(記103番)で、「雄略天皇が朝も夕も愛用しておられる、膝置きの下の板になりた」という歌です。『万葉集』3番歌では、「父・舒明天皇が朝も夕も愛用しておられる、膝置きの下の板になりた」という歌です。『万葉集』3番歌では、「父・舒明天皇が朝も夕も愛用しておられる、膝置きの下の板になりた」という歌です。

【訳】 靈魂のきわまる命——宇智の広々とした野に馬をつらねて、朝、踏んでおられるでしょう。その草深き野よ。

「たまきはる」の枕詞は「内」「命」にかけ、内在する生命力を想起させる語です。この歌を読むと、獲物が潜む草深い山野が眼前に広がります。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)